

大学

アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2009. 3. 31 No.40

Eastern Japan Section, The Japanese
Association of College and University
Archives

目 次

- ・阿久津朋子「曖昧な戦後のなかで—山里勝己氏講演
「大学の誕生—占領と琉球大学」を聞いて」…………… 1
- ・谷口 豊「山里勝己氏講演「大学の誕生—占領と琉球大学」・
新崎盛暉氏講演「沖縄戦後史と沖縄大学の歩み」を聞いて」…………… 3
- ・市村 麻衣「全国研究会（テーマ「戦時下・占領下・米国統治下における大学史料」）に
参加して」…………… 4
- ・藤岡 洋保「講演・日本の建築アーカイヴズの現状と課題
—日本建築学会建築博物館の活動を中心に—」…………… 6
- ・西山 伸「「大学史展」実行委員会におけるこれまでの議論について」…………… 9
- ・永藤 欣久「東洋学園大学における年史編纂と史料室設置までの経緯」…………… 11
- ・全国大学史資料協議会2008年度総会議事録・記念講演記録(抄)…………… 13
- ・全国大学史資料協議会2008年度役員会議事録(抄)…………… 15
- ・全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録(抄)…………… 15
- ・全国大学史資料協議会東日本部会研究会記録(抄)…………… 20
- ・全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿…………… 25

2008年10月9日～11日 全国大学史資料協議会2008年度総会ならびに全国研究会・記念講演

曖昧な戦後のなかで
—山里勝己氏講演「大学の誕生—占領と琉球大学」を聞いて

武蔵野美術大学大学史史料室 阿久津 朋子

「戦争を知らない子供たち」という歌のタイトルを聞いたことがある。曲はよく知らないが、私はまさにその名のとおり世代である。物心ついたときにはすでに日本が関わった戦争というもの教科書の中の出来事だったし、沖縄というものは人気の観光地という位置づけになっていた。そして、大学は北海道から沖縄まで誰もが自由に選べ、受験できる体制が整っていた。

今回の山里氏の講演は、そのように全てが用意され整えられた時代を生きる私たち世代

も、一度は必ず足を止め、振り返り、考えなければならぬことがあるのだと、改めて気づかされたものとなった。

1945年8月15日、第二次世界大戦終結。その翌年からハワイにおいて湧川清栄氏や日系の人々によって「ハワイ沖縄救済更生会」が設立され、1947年頃から沖縄大学設立計画の運動が始められた。湧川氏によると沖縄を変えるため、モノを贈るのではなく、大学を創ろうという思いから全てが始まったのだという。そして1950年、確かに沖縄に「琉球大学」

という大学が開学されることとなった。しかし、当時まだ沖縄はアメリカの統治下であった。そのため、琉球大学設立の経緯などについては沖縄側からの視点ではなく、アメリカ側からの視点でしか書かれなかったという。

また「琉球大学」という名称にしても、アメリカの軍事的な意図があったのではないかと、大学設立に大きく関わった山城篤男氏（当時：沖縄民政府文教部長）は述べているという。アメリカ政府は沖縄の人々を日本に同化した少数民族として捉え、統治下においており、なるべく日本と離しアメリカ側に引き寄せておくために、独立していた頃の呼称である「琉球」という名を取り入れたのではないだろうか。

実はそれらを裏付けるであろうことは、開学記念式典が挙行された日付けにも表れている。2月12日。それはアメリカ合衆国の偉大な大統領である奴隷解放の父、エイブラハム・リンカーンの誕生日だったのである。

私たちは普通、1945年8月15日から戦後が始まったと認識してしまう。だが、その後、27年もの間、沖縄には本当の意味での戦後というもの訪れていなかったのだ。いや、1972年に日本への復帰が果たされた後も、沖縄に戦後が訪れたのかどうかは微妙なところであろう。すでに1956年には『経済白書』に「もはや戦後ではない」という言葉が使われ、本土の人々は沖縄の人々を置き去りにしたまま、高度経済成長の波を泳いでいた。日本に復帰したのはいいものの、何もかもがうやむやになったまま、「歴史」という名で括られてしまったようにも思えてならない。

そんな複雑な時代の、様々な人々の意図の中を生き続けながらも、多様な学科を設置し、多くの学生を育ててきた琉球大学。その基本理念は「自由平等、寛容平和」であるという。それは真意を問わずとも、誰もが自然に頷けるものであろう。沖縄の人々が見た、戦争の



講演する山里勝己氏

現実というものは、私の想像をはるかに超えるものであることは確かだ。私たちが普段何気なく口にする「自由平等」や「平和」という言葉がどれほど重いものであるかを突きつけられた気がする。

けれども、時代というのはいつも前に流れてゆくものである。真の自由平等、真の寛容平和を心に留める人々が時代とともに流れていってしまわないとも限らない。多くの緑に囲まれた暖かな気候の中、各々の勉学に励む琉球大学の学生達には、必ず一度は足を止め、この理念に込められた多くの人々の願いに目を向け、それを見失わずに歩み続けていくであろうことを願うばかりである。

そしてそれはどの大学にも言えることである。今、大学には平成の時代に生まれた学生たちが続々と入学し始めている。「昭和」というものは徐々に昔と呼ばれ、日本における「戦争の記憶」というものは確実に遠くなってきている。学生たちが自分の目で未来を見つめ、今を一步ずつ確実に歩いて行けるように導くためだけにあるのが大学であるならば、それはそれでいいであろう。しかし、私も含め、今、自分たちが立っている場所がどのような地であるのか、そしてどのような人々が築きあげたところに立っているのかを理解してこそ、私たちは本当の未来というものをしっかりと見据えることができるのではないかと、今、私はそう思っている。

全国大学史資料協議会2008年度総会ならびに全国研究会・記念講演・特別講演

山里勝己氏講演「大学の誕生—占領と琉球大学」・ 新崎盛暉氏講演「沖縄戦後史と沖縄大学の歩み」を聞いて

日本体育大学図書館 谷口 豊

大学史資料に関する全国組織の存在を知り、本学図書館が加盟館となって、今年でまだ3年目。年1回の全国総会・研究会、東日本部会での研究会に参加する中で、大学史資料の世界を把握できるようにと心がけているところです。

前回の成蹊大学から会場を西に移して、今回は琉球大学での開催。東日本・西日本両部会合同の全国研究会がスタートしてから12年目だそうですが、協議会のホームページも、昨年度2008年2月に持ち上げられ、外部に向けた貴重な「窓」が確保されています。

この全国組織のもとに、東西合同はもとより、国立・公立・私立が加盟して一つのテーブルを囲んでいることの重要性は決して低くないと思いますが、教員も職員も一つの組織のもとに集まって交流の場を形成していることは、大所帯ではないことの強みということでもあるのですが、貴重な組織体というべきでしょう。

初日の総会議事は、議長団の依頼があり、進行役の一人を仰せつかることになり、目立つ場所に座って慣れぬ立場に立たされることになりましたが、総会後には記念講演、夕刻からは情報交換会というプログラムでした。

初日総会後の記念講演「大学の誕生—占領と琉球大学」(琉球大・山里勝己氏)は、戦後のアメリカ統治期に、占領軍政策の一環として誕生し、1965年琉球政府移管となるまでの琉球大学開設に至る経緯を初めて知る機会となりました。アメリカが、ハワイ、プエルトリコ、フィリピンなど、海外に作った大学と並べて琉球大誕生を見る視線は新鮮でした。その誕生から数えて2年後には「還暦」を迎

える時期に当たっていて、60周年記念誌作成委員会が持ち上がったタイミングだったようです。本協議会に向けて、支援を要請する“あいさつ”もなされました。

大学史資料の集め方に関して提供されたトピックを一つ特記しておこうと思います。敗戦国の「リ・オリエンテーション」の一環として琉球大の誕生をリードしたミシガン州立大学を講演者が訪問し、大学文書館を見学した際、大学(史)文書の残し方に感銘を受けたことが披露されました。学長の手書きメモから同時にタイプ打ちされたものを作成して、その両方で保存し、決定のプロセスを透明化しているのだとか。このことの重要性は日本においても同様のはずですが、「文化の違い」を乗り越えることのむずかしさをかえって意識させられたトピックでした。

本学が猪谷千春氏から寄贈を受けているIOC(国際オリンピック委員会)の委員会文書類には、「何年まで公開不可」と制限の付されたものが混じっています。これと同じやり方で、学長メモが「在任中公開不可」、「完成まで公開不可」等の形で大学文書館が預かり、残らず保存するという「ルール作り」ができないものかを念じてきた身には、こうした話題に触れると、「文化の違い」をなんとかして乗り越えられないものかを思ってしまう。わが国の政府・官庁の公文書の保存が取りざたされ、「情報公開法」の枠組みがあっても、十分にそのルールが根付かないことを考えると、私学においておや、という「道遠し」の感を禁じ得ません。

二日目に用意された特別講演「沖縄戦後史と沖縄大学の歩み」(元沖縄大学長・新崎盛

暉氏)は、沖縄最初の私立大学・沖縄大学の元学長・現理事長からのもので、全学協議会の自主管理時代や、存続を求めて文部省前座り込み敢行などを乗り越えてきた、いわば「私立大学サバイバル・リポート」でもありました。

新崎氏は沖縄の戦後を日本本土と比較する形で、次のようにわかりやすく提示しました。「沖縄の占領は、直接支配という意味で本土占領と大きく違う。日本本土が『連合国軍』による支配だったのに対し、沖縄は直接的な『米軍』支配だった」。琉球大創設も、米軍指令22号に基づくものだったことは、この実態を例示するものといえます。

琉球大を誕生させた戦後沖縄の大学設立運動の推進力として、氏は三つの背景をあげています。8・4制のあとの高等教育機関の受け皿がないハイスクール関係者からの切実な声、ハワイの沖縄出身者からの支援、そしてそれらの地元の意向を「掠め取る形で」(講演者)、ミシガン・ミッションにより米軍が作った、と。

沖縄大学の50年史出版(2007年)についても触れ、思い入れの一端が披露されました。「箱入りの豪華版としてではなく、店頭に並ぶ新書版として出したかった。(閉じられた関係者配布ではなく)商業出版社からの刊行



講演する新崎盛暉氏

は、『第三者評価』を仰ぐということ」と意味付けし、「大学が存立している社会との関わりを書いた大学史は見あたらない。正史をこういう形で出したところは他にないと思う」と、自負を静かに語って、迫力を感じさせるものでした。

沖縄返還時に、設置基準を充たしていないとして廃校を命じる政令に立ち向かうことになった「沖大」は、全国的に大学解体が叫ばれる時代状況の中で、地域に根ざした教育実践によって生き残ることになったわけです。そうした困難をなめ尽くしてきた大学人の言葉として、50年史出版に込められたものを理解したい、そう感じさせる特別講演でした。

以上、参加報告といたします。

全国大学史資料協議会2008年度全国研究会

全国研究会(テーマ「戦時下・占領下・米国統治下における大学史料」)に参加して

成蹊学園史料館 市村 麻衣

はじめに

2008年度の全国大学史資料協議会全国研究会は2008年10月10日(金)、琉球大学研究者交流施設50周年記念会館において開催された。今回の研究テーマは「戦時下・占領下・米国統治下における大学史料」である。これらは

各大学の歴史を物語る上で非常に重要な時期であるが、さまざまな事情から資料の収集、評価が非常に難しい時代でもある。従来の大学史編纂ではあまり触れられてこなかった史料をテーマとした本研究会は個人的にも非常に興味深いものであった。



パネルディスカッションの様子

研究会においては、午前中に嘉数学園理事長、元沖縄大学学長・新崎盛暉氏による特別講演「沖縄戦後史と沖縄大学の歩み」、午後より現場からの報告として立教学院史資料センター・豊田雅幸氏による「立教大学における戦時下研究と資料」、広島大学文書館・石田雅春氏による「新制国立大学の成立と占領軍文書の関係についての一考察—広島大学と九州工業大学の事例比較から—」という二つの報告があり、その後特別講演と二つの報告に対する質疑応答を中心に研究討議された。以下にプログラムへの参加感想を書き留めていきたい。

【特別講演】

新崎 盛暉氏

(嘉数学園理事長、元沖縄大学学長)

新崎氏の講演では、戦後の沖縄最初の私立大学である沖縄大学（旧沖縄短期大学）の設立、沖縄返還後現在に到るまでの歴史が述べられた。返還後、沖縄大学は日本の大学設置基準を充たすため政府が提案した私立大学統合策に対し統合賛成派と自主存続派に分裂、結果的に、規模を縮小して存続を果たした。その後、沖縄大学は本土（日本）とは異なる“沖縄の独自性”を生かした大学再建に取り組み、それは現在も地域に根ざした大学創りに生かされている。

新崎氏の講演は沖縄が戦後米国統治下でど

のような状況におかれていたか、また、沖縄返還を経ていかに変革してきたかを示すものであり、戦争という一時期を経て、沖縄と本土との歩んできた歴史の違いを深く認識させられる講演であった。

【現場からの報告】

報告① 豊田 雅幸氏

(立教大学 立教学院史資料センター)

豊田氏の報告では、立教学院史資料センターが設立直後に戦時下研究に着手した経緯と研究活動、および立教学院の戦時下関係資料について述べられた。院史資料センターは、戦没者記念碑設置にともない大学自体が戦時下の客観的評価が求められたこと、また戦時下研究を行うに充実した研究者・スタッフが組織されたことが要因となり、戦時下研究を最初のテーマとして発足した。その後、周囲のミッション・スクールとの対比を研究テーマとし科研費を申請、基幹資料の整備と報告書および論文集の刊行を行った。基幹資料の整備はこれまでに収集した資料に絞って資料調査を行い、理事会資料や日誌、学内刊行物等の中から重要と思われる資料のテキスト化、目録化を進め、これらのデータは外部の研究者にわたり、研究の活性化が図られた。

周年史発行後の資料をいかに活用していくか、という点はどの大学でも抱えている問題であろう。戦時下研究をテーマとした院史資料センターの取り組みは資料の活用を“研究”メインのものとし、明確な目的のもと、いかに収集した資料を活用していくかの具体的な事例の報告であった。

報告② 石田 雅春氏（広島大学文書館）

石田氏の報告では、戦後の国立大学の再編・統合について、「新制国立大学実施要綱」にあるように占領軍・文部省の“おしつけ”ではなく要綱以前の大学・地域の自主性によるものとの前提で、新制国立大学発足時に地域

社会が高等教育機関に与えた影響について述べられた。石田氏は、戦前の広島文理科大学など8つの前身校からなり、国立大学の中でも大規模な統合を行った広島大学と、前身校である明治工業専門学校がそのまま単科大学として昇格した九州工業大学の2校を事例として挙げ、前者は官立学校の地方委譲問題に端を発する猛烈な誘致運動、地域間対立により生まれた地域支援により大規模な総合大学となり、後者は「新国立大学実施要綱」における国立大学設置の十一原則の例外地域であり、かつ明治工業専門学校自体が大学昇格にかなり有利であったという背景から地域の支援が活性化されず、結果単科大学を志向したのでであると述べられた。

また石田氏は2校の地域との関係が占領軍文書の残存数に影響を及ぼしていると指摘し、文書の残存状況は政治的な運動、成立過程と

いったことが影響を及ぼすと述べられた。

むすび

特別講演では米国統治下という特異な環境下にあった沖縄の大学と本土との認識の違いを痛感した。それは二つの研究報告では米国、占領軍、文部省、そして地域といったさまざまな要素を多角的な視点から調査研究した事例である。他のミッション・スクールとの対比や3度に亘る海外資料調査の成果として戦時下の当局との関係性を検証した立教学院、また地域との関係性という点からその発足に関する研究考察をされた広島大学の2件の事例は具体的な資金の獲得、史料へのアプローチの方法も含め、今後戦時下・占領下の大学の実態を捉えていく上で非常に参考となる研究報告であった。

2009年1月22日(木) 研究会

講演・日本の建築アーカイヴズの現状と課題 —日本建築学会建築博物館の活動を中心に—

講師：藤岡 洋保
(東京工業大学大学院教授、日本建築学会建築博物館委員会幹事)

1. はじめに

今日は、近代建築史の研究者として長年建築図面を整理・研究してきた立場から、「建築アーカイヴズ」についてお話しします。具体的には、建築の図面・写真の特性、学術資料としての可能性、その保存・公開の留意点を紹介しながら、日本建築学会建築博物館を例に、蒐集・公開の方針や、それに関する課題やその対応策について説明します。そして日本における建築博物館の将来像について、私見を述べたいと思います。

まず「建築アーカイヴズ」とは何かということですが、これは建築に関する記録を蒐集保管し、公開する機関とお考え下さい。一般的には「建築博物館」と呼ばれるものです。

その蒐集対象になるのは、おもに建築図面(特に設計図)や、設計者による設計趣旨とか、施主の要望を記した書簡などの文書、竣工写真などです。設計中や竣工時につくられた建築模型も対象になり得ます。

それを蒐集保存し、公開するものとして「建築博物館」があります。欧米では、1934年設立の国立シューセフ建築博物館(モスクワ)が最初といわれ、第二次大戦後に多数設立されました。なかでも、フィンランド建築博物館(Suomen Rakennustaitteen Museo, 1956)や、カナダ建築センター(Centre Canadien d'Architecture, 1979)、建築・文化財博物館(Cite de l'architecture et du patrimoine, IFA)を中心に拡大改組して2007年にパリ・シャ



講演後質問に答える藤岡洋保氏

イヨー宮にオープン)はその代表的なものです。

世界の建築博物館の連合体として、1979年設立のicam (International Confederation of Architectural Museums)があり、資料保存方法などの情報交換を行っています。その名称に“confederation”とあることに示されるように、アーカイヴズや建築図書館、建築系のギャラリーを含む、幅広い連合体であることを目指しています。現時点での加盟団体数は102で、欧米中心の組織です(日本からは建築学会のみ)。その内訳を見ますと、設立の経緯や、その国における建築の位置づけに関連して、そのあり方は多様です。つまり、決まったやり方があるわけではなく、新たに「建築博物館」を立ち上げようとするとき、必要に応じてかなり自由に目的や蒐集対象を想定してかまわないということです。

その主な蒐集品といえるのが建築図面ですが、さまざまな種類があります。設計意図を示すショー・ドローイングから、建設現場に指示するためのワーキング・ドローイングまで、また基本図面(平面図や立面図、断面図など、建物の全体の様子を示すもの)から詳細図、構造図、設備図、現寸図まで、実にさまざまです。ちなみに、欧米の建築博物館はこのうちのショー・ドローイングを中心に蒐集しているところが多いようです。それは建築図面の価値を美術品としての側面に見てい

るということです。

図面のコレクションは日本にもあります。代表的なものとして、伊東忠太資料、後藤慶二資料、清家清資料(以上は建築学会建築博物館)、木子文庫(都立中央図書館)や、岡田信一郎・捷五郎資料(国会図書館)、第一生命館資料(第一生命)、ヴォーリズ資料(大阪芸術大学)、村野藤吾資料(京都工芸繊維大学)、今井兼次資料(多摩美術大学)、堀口捨己資料(明治大学理工学部および東工大藤岡研究室)、横河工務所資料(横河建築設計事務所)などがあります。

2. 図面資料の特性

日本ではこれまで建築図面の蒐集・保存にはあまり関心が寄せられませんでした。それはその資料的価値が認識されていなかったことや、保存や利用のためにかかなりのスペースや労力を要するためと考えられます。また、図面資料が多様であるために保存対象の選別が難しいことや、受け入れ時には未整理のことが多く、利用可能にするためにかかなりの時間と労力が求められるという問題もあります。

どこまでを「資料」と見るべきかという問題については、収蔵スペースの問題はありますが、できるだけ多くを残すことを考えるべきで、その取捨のための価値判断を先送りすることが望ましいと、私は考えています。それは、資料の価値は自明ではなく、その時々々の建築観などのコンテキストの中で、他の資料との「関係」によって変わるからです。価値は「発見」するものです。

また、図面資料がオールマイティではないことにも注意しなくてはなりません。それだけではその建物が設計図通りに建ったという保証が得られないからです。雑誌に発表された竣工写真などで補完する必要があります。

次に建築図面の意義についてですが、それは、それをていねいに分析すれば設計意図が読みとれるのでその設計者に対する評価を深

められることや、詳細図や構造図などから、図面が描かれた当時の建設技術や材料などについて技術史的な知見が得られることに求められます。つまり、その分析や考察を通して、過去の設計のやり方や建築家の思想、さらには広く建築のつくり方をより深く学ぶことができます。その際、現代の建築観をもとにそれを見ることになるので、いまの設計のやり方やつくり方とは異なる考え方があったことを知ることになり、それがいまを相対化しつつ、新たな建築観を醸成する手がかりになり得るのです。そのためにも、できるだけ多くの資料を残すことが望ましいわけです。

ここで、図面資料が残っていれば新しい知見を得ることができるという事例を、清家清設計「齋藤助教授の家」(1952)と堀口捨己設計「市街地の一住宅」(1936)の図面をもとに示します。前者については、これまで『新建築』1953年2月号掲載の清家の説明文だけをもとに語られてきました。しかし清家資料の分析の過程で計画案が少なくとも3つあることがわかり、それを比較精査することから、彼が、設計時に次々に派生した難しい状況にその都度柔軟に対応したことが、むしろこの傑作を生むもとになったことを知ることができました。また後者は、明治大学と私の研究室に保存されている図面にある、「改修設計図」や「実測図」から、実は既存建物の改修だったこと、そしてそれをもとに堀口の1937年の手帳の記述と当時の電話帳を参照することから、敷地と施主を特定でき、住宅というより置屋だったこと、施主が「モダンな置屋」を望んでいたことがわかりました。つまり、堀口が竣工時に雑誌に発表したことと実態はかなり異なっていたわけで、そこから、彼がこの建物をどう位置づけようとしていたかが見えてくることになります。これは、ほかの資料と組み合わせ、図面資料を活用した例でもあります。

3. 図面資料の保存・公開

日本建築学会建築博物館は2004年1月に設立されました。その主な蒐集資料は、近代の建築家に関わる図面と写真です。資料の整理公開のやり方は博物館の目的によって異なります。この建築博物館は学術目的ですので、整理の際に資料の分析をきちんとすることを重視しています。

その資料蒐集の方法についてですが、まず資料の寄贈申し出があったとき、その概略を確認して、お断りするか、受け入れの方向で検討するかを決めます。後者の場合は建築博物館委員会にかけ、そこで認められれば、「仮受入れ」とし、資料1点ずつのデータベースを作成しその内容をチェックするためのワーキンググループをつくります。その作業が終わると、再び同委員会にかけて、博物館の収蔵品にするかどうかを決定します。そこで承認されると、寄贈者と、受入れ資料の範囲や、所有権・利用権、公開する資料の範囲などについて取り決めを交わします。その過程を経て、ようやく「正式受入れ」(収蔵品)となります。したがって、資料の整理とデータベース作成に労力と時間がかかりますが、この過程こそが学術的知見を得るのに重要で、効率重視とは相容れません。

そして、図面や写真の現物は、特別な例外を除いては、閲覧に供しませんので、公開にはデジタル化が必要になります。本博物館では、iPallet という、東京大学史料編纂所と堀内カラーが開発した閲覧ソフト(1枚の図面を複数の小画面に分けてデジタル化することによってディスプレイ上の操作性を高めたもの)を使うことを前提に、画像は tiff で保存しています。そして資料を傷めないために、スキャナーではなく、超高解像度のデジタルカメラでデジタル化する作業を、科学研究費をいただいて続けています。デジタル化しても現物を残しておくことが重要です。というのは、デジタル化はオールマイティでは

なく、メディアやソフトが変わると使えなくなってしまう恐れがあるからです。その技術は日進月歩なので、今後の展開は予測できません。デジタル化した情報もその都度更新する必要があります。

4. 写真資料の保存・公開

写真資料の問題は、著作権保護とコピープロテクトの両立のむずかしさにあります。写真資料も劣化しますが、現時点では、プロカメラマンは寄贈や寄託をためらっています。アメリカの Esto 社のような、著作権保持者から委託を受けてデジタル化し、その使用料が得られるときにその一部を保持者に渡すというような、カメラマンの仕事に敬意を払うシステム、それも中立的機関によるものがないと、写真資料の保存はなかなか進まないと思います。

また、写真資料にはいつ撮影したかがわからないことが多いという問題もあり、図面や雑誌などで補う必要があります。

5. 建築博物館のネットワークの構築

日本建築学会建築博物館では、全国の建築

資料を独占しようとは考えておりません。東京以外の人にとってそれは不便ですし、大地震などで保管場所が罹災する恐れもないとはいえません。分散保存の方が日本では安全ですし、大切に保管してもらえらば、どこにあってもいいわけです。そして、それらをネットワークでつないで、デジタル情報を交換できるようにし、日本全体でひとつの建築博物館として機能するというのが、私の描く理想像です。その実現に近づけるために、求められれば、私が30年以上の資料整理・分析で培ってきたノウハウは喜んで提供する用意があります。

6. まとめ

以上、建築アーカイヴズの現状と課題についてお話ししました。建築の資料は、扱いにくいものではありませんが、その価値は自明ではなく「発見」するものなので、できるだけ多くを後世に伝える努力をすることが必要です。それが後世の建築研究の手掛かりを増やし、新たな建築思想を醸成する一助になると信じております。

2008年3月6日(木) 研究会

「大学史展」実行委員会におけるこれまでの議論について

京都大学大学文書館 西山 伸

東日本部会では、2007年度総会において大学史に関する展示を開催することが決定され、その決定に基づいて実行委員会が組織された。実行委員会は、会長校（明治大学）、事務局校（中央大学〈2008年度より日本大学〉・武蔵野美術大学）、日本女子大学成瀬記念館、成蹊学園史料館、秋山俱子氏および西山を構成員として、「大学史展」のテーマ、開催時期、場所等について4回の委員会を開催して議論を重ねてきた。そこで議論された主な論

点は、①これまでの会員校による展示の蓄積を生かしたテーマを立てること、②特定の大学に偏るテーマではなく、日本の大学史にとってある程度普遍的なテーマを選ぶ必要があること、③できるだけ多くの会員校が参加できるテーマを設定すること、④展示の対象者を想定しておく必要があること、などであった。そして議論の結果、展示のテーマとして「戦争と大学」および「大学の設立」の2案を候補として絞り込み、それぞれのテーマで開催

した場合の具体的内容、課題等についても検討を行ってきた。

テーマの正式決定に先立ち、実行委員会では前記のようなこれまでの議論を広く会員校に紹介し、率直なご意見をいただく場が必要と判断して幹事会に諮ったところ、幸い2008年3月6日の研究会をそのような場として位置づけていただくことになった。当日は、まず村松玄太氏（明治大学）が「大学史展の傾向について—全国大学史資料協議会会員へのアンケート結果から—」と題した報告を行い、次いで西山より「『大学史展』シミュレーション—戦争と大学—」、鈴木秀幸氏（明治大学）より「テーマ『大学の設立』について」という報告を行った。

〔村松報告〕

村松報告は、実行委員会が行った会員校による展示の状況を調査したアンケートの結果をもとに構成された。同報告では、これまでの展示テーマとしては、大きく(1)大学の沿革史展示と(2)テーマ展に分類できるとし、(2)の具体的内容として、(i)創業者・卒業生等の人物、(ii)創立期の大学、(iii)教育のあり方、行事等の大学生活（戦時下における大学と学生を含む）、(iv)キャンパス・施設、(v)大学と周辺地域、(vi)旧制高等学校等の関連学校、(vii)戦後の大学、(viii)大学アーカイヴズ、(ix)その他、に分けることができた。その上で、傾向として、①沿革史展示は多数の大学で実施されているが、全体的な流れとしてはテーマ展の開催が増えつつあること、②創立期の展示から次第に時代を下った時期を扱った展示が増えつつあること（ただし戦後の展示はまだ少数）、③戦時下の学生と大学を扱った展示が近年急増していること、が見られるとの指摘があった。

〔西山報告〕

西山報告では、まずこれまでの会員校による戦争関連展示について、学徒出陣を中心に、勤労動員・報国団・疎開等の大学生活、学問



報告する西山 伸氏

思想への弾圧等のテーマが取り上げられている一方で、旧制高校・専門学校、女子教育あるいは研究・教育の実態についての展示はまだほとんど開催されていないとの指摘があった。

次いで、実際に展示を開催する場合は、軍事教練が開始され、学問思想の自由への弾圧が本格的となった1920年代後半から、敗戦直後の時期までを対象とするべきであり、近年歴史研究の対象として捉えられてきた「戦争と大学」に関する現段階での多様な成果を積極的に取り入れる必要があるとの指摘があった。そして、京大における展示（企画展「京都大学における「学徒出陣」」）の経験から、この種の展示には社会的関心が非常に高いこと、観覧者・新聞報道等の反応は極めて「冷静」であったことの報告があった。とはいえ、不特定多数を対象とする展示の場合は内容について十分な吟味が不可欠であり、特にいわゆる大学の戦争協力や加害の側面をどのように扱うかといったことは、部会内部での基本的なコンセンサスを得ておくことが求められるのではないかと指摘があった。

〔鈴木報告〕

鈴木報告では、まず日本の大学史全般についての先行研究の蓄積がまだ少ないとの指摘があった。そして、「大学の設立」とのテーマを設定するにあたっては、何をもって設立と考えるのか、すなわち近代以前の教育機関

や法的に大学と認可される前の段階における学校をどう扱うか、といった問題は大学によって位置づけが異なっている場合があること、創立者の確定についても必ずしも共通の方法があるわけではないことの指摘があった。

実際に展示を開催する場合は、明治初年の政府部内における試行錯誤や法律学校・宗教系学校等の私学の登場を起点として、敗戦後の教育改革とその後の新制大学までが対象とされるべきとしたが、各時期の時代的特徴と大学設立との関係の有機性を常に指摘できる

とは限らず、ともすれば記述が平板なものになってしまう危険性があるとされた。従って、展示の編成については、例えば時期区分を主として何らかのテーマをもつ事項をそれに組み込む形とする、あるいはその逆を考える等、かなりの工夫が求められるとされた。同時に、各大学の「設立」の位置づけについて、確実な基本データを作成することが展示の基礎作業として不可欠のものとなろうとの指摘があった。

2008年12月11日(木) 研究会

東洋学園大学における年史編纂と史料室設置までの経緯

東洋学園大学 東洋学園史料室 永藤 欣久

はじめに

東洋学園大学（学校法人東洋学園）は2007年3月、大学史『東洋学園八十年の歩み』を編纂、刊行し、2008年4月には大学史資料保存と公開を意図した「東洋学園史料室」を設置した。

本学における大学史編纂は今回が初めてのことでない。しかし、固有の歴史的経緯から旧制期の事績をほぼ捨て去り、創立の経緯や学制改革時の改組について正面から取り組んだことはなかった。周年起点は従来、新制短期大学設置の1950年だったのである。また、既刊年史の内容は「記念誌」の範疇を超えるものではなかった。

2006～7年の編纂で初めて公式に周年起点を旧制期まで遡り、初歩的な段階ではあるが大学史資料の収集、調査、保存、公開等へと展開した近年の取り組みを報告したい。

I 東洋学園史の梗概

本学の創立は、旧制東洋女子歯科医学専門学校が歯科医師法（旧法）第1条第1号に基づく文部大臣指定校認可を受けた1926年11月

4日としている。前身である明華女子歯科医学専門学校（←歯科医学校←歯科医学講習所）の設立は1917年のことであるが、これは経営体制を別のものとして周年には算入していない。所在地は明華極初期に西片（旧本郷田町）にあった他は、一貫して現地の本郷1丁目（旧本郷元町）である。旧制歯科医専は男子7校（含外地1）、女子2校が存在した。旧制における文部大臣指定校は歯科医術開業試験受験を免除され、卒業と同時に歯科医師免許が交付、歯科医籍に登録された。

戦後の学制・医療制度改革で歯科医専は大学への昇格が図られ、新制歯科大学へと改組を遂げたが、本学のみ英語科女子短期大学に転換した。現在は学年別2キャンパス（文京区・流山市）に人文・現代経営2学部（共学四年制）、大学院で構成している。

戦後特設旧制高校である東洋高等学校（理科乙類＝医学部予科）、各種学校の東洋女子歯科厚生学校（歯科衛生士）、東洋文化学院（英会話・英文タイプ、一時期は大学進学予備校）が存在したが現存しない。



報告する永藤欣久氏

II 過去の年史編纂 「周年行事・記念誌」 的発想の時代

短大設置20周年の1970年、40周年の1990年に二度の年史編纂、及び1985年の東洋女歯同窓会紫苑会による編纂の3点について、具体的事例を挙げつつ、それぞれの編纂意図と残した課題を挙げた。

大学側編纂では旧制期を記録する努力を半ば放棄し、僅かな記述にも錯誤が多い。同窓会編纂は卒業生の記憶に拠り、オーラルヒストリーとして貴重ではあるが、いずれも公的な記録として用い難いものがあった。

III 短大廃止 旧制から一貫する東洋学園史 として再構築

1992年に共学の大学（当初流山のみ）を設置して以降、2006年の女子短大廃止に至る間、18歳人口減少に対応する頻繁な改組、人材の入れ替わり、経営者の世代交代、2キャンパス間の心理的懸隔（女子短大と共学四大）等から、次第にアイデンティティが薄れる傾向が出てきた。

こうしたさ中の短大の廃止は、戦前から女性の自立のために果たしてきた役割を再定義し、旧制から一貫して記録すべきという積極的発想を生むインパクトになった。80年史編纂の構想当初は未だ「記念」の発想に留まりつつも、編纂開始後は未整理の旧制期資料を法人本部より移管し、初めて文献調査を行な

うことになった。

編纂着手の直前、短大最終卒業式の日「東洋学園アーカイヴズ」が流山に設置された。文献調査が及ばなかった同施設の内容はIIで述べた既存校史のレベルに留まり、展示手法も素朴なものだったが、学内に常設展を設置する足がかりとなった。この施設は80年史刊行後、さらに1年の調査期間を経て本郷に「東洋学園史料室」として発展的移設された。対象範囲は旧明華を含む前半半世紀の1968年までとし、史資料約120点、写真・画像資料約160点を展示、約18㎡を資料保存用の収蔵庫としている。

また、2007年の本郷校舎建て替えに際しては短大時代のモニュメント（故今井兼次の大モザイク壁画 1961年）を存置し、建築の保存についても措置がとられた。

IV 現在の取り組みと課題

1. 調査・収集・編纂・展示・整理保存

学内外史資料と卒業生・教員遺族に対する調査を継続し、今年度は年表式資料の編纂にあたっている。歯科医学史で日本歯科医学史学会、大学史では当会に、また文京区内博物館・美術館の連合組織「文京ミュージアムネットワーク」に所属し、学外との繋がりを図るとともに、専門知識の向上に努めている。これらは大学アーカイヴズとして当然のことであるが、小規模校における環境ではより大学経営に資する側面を強調する必要がある。史料室は施設として存在するが、人事・組織上では広報室の一機能の段階である。このため学内には、大学史活動が大学の付加価値と知名度向上に寄与することを前面に出している。以下、

2. 「設置16年の東洋学園大学」に「創立80年の東洋学園」の伝統イメージを付与

3. 共学化による旧設置校卒業生の心理的抵抗感を緩和し、帰属意識を醸成し、現四年制大学を母校として認識してもらうインセン

タイプとする（卒業生組織化対策）

4. 学生・教職員への自校史教育

5. 学外一般に公開し、地域に貢献する

2～5を前面に、そのため1が必要として業務の恒常化を図り、次の段階として公式の組織化を目指したい。

本学は時代ごとの各設置校間で断絶があり、伝統を育み難いものがあった。これには複雑

な事情が背景にあり、ここでは触れないが、このような風土の中で、各設置校間を一貫して統合された東洋学園史を構築することに取り組んでいる。また、歯科医学史、女子高等教育史、広義には近現代史の中における本学の位置づけ、存在の意味を見出したいと考えている。

全国大学史資料協議会2008年度
総会議事録・記念講演記録(抄)

日時 2008年10月9日(木)

14時40分～15時15分

会場 琉球大学

研究者交流施設50周年記念館

出席 <東日本部会>

- 愛知大学 神奈川大学 関東学院
- 慶應義塾 駒澤大学 芝浦工業大学
- 上智大学 女子美術大学 成蹊学園
- 専修大学 大東文化大学 東海大学
- 東京経済大学 東北学院 東洋大学
- 南山大学 日本体育大学 日本大学
- 北海道大学 武蔵学園
- 武蔵野美術大学 明治学院
- 明治大学 立教大学
- 中村 青志 (東京経済大学)

<西日本部会>

- 大阪大学 大谷大学 関西大学
- 熊本大学 神戸女学院 同志社大学
- 広島大学 福岡大学 桃山学院
- 立命館 龍谷大学
- (オブザーバー 宮本和子
(沖縄キリスト教学院大学))

*東日本部会分

<機関>24校(30名)<個人他>1名

<合計>31名<情報交換会>30名

西日本部会分

<機関>11校(14名)<個人他>1名

<合計>15名<情報交換会>15名

開 会 司 会 桃山学院 西口 忠氏 (西日本部会副部会長校)

*開会に先立ち、司会より総会成立の報告があった。

開会挨拶 関西大学 熊 博毅氏

(全国大学史資料協議会会長校)

議長選出 議 長 福岡大学 後藤 正明氏
副議長 日本体育大学

谷口 豊氏

議 題 1. 全国大学史資料協議会役員会の報告について (承認事項)

協議会事務局(桃山学院、西口忠氏)より、本総会開催に先立ち開催された全国役員会での審議経過が報告され、次年度の両部会共同事業として、研究叢書第10号刊行の件(西日本部会編集担当)が提案され、全会一致で承認された。

2. 2008—2009年度役員交代について (承認事項)

桃山学院、西口氏より、役員会において、会長を明治大学(東日本部会会長)、副会長を同志社大学(西日本部会部会長)、事務局を武蔵野美術大学にそれぞれ選任したとの報告があり、全会一致で承認された。

3. 2008年度東・西両部会事業計画報告 (報告事項)

東日本部会事務局（武蔵野美術大学石田順二氏）・西日本部会副部会長校（桃山学院西口氏）から、配布資料中の各部会事業計画書にもとづいて本年度事業の概要が報告され、全会一致で了承された。

4. その他

西日本部会副部会長（桃山学院西口氏）より、協議会ホームページの一部整備について東日本部会幹事会から提案があり、西日本部会で検討した上で、両部会で更に協議していく事が報告された。

新会長挨拶 明治大学 鈴木 秀幸氏
 記念講演 15時30分～16時40分（公開講演）
 会場挨拶 琉球大学学長 岩政 輝男氏
 講師紹介 辻 雄二氏（琉球大学教授）
 講師 山里勝己氏（琉球大学教授、琉大60周年記念誌作成委員会委員長）
 演題 「大学の誕生—占領と琉球大学」
 概要 山里氏の講演は、「大学の誕生—

占領と琉球大学」と題し、琉球大学の誕生についてハワイや沖縄での大学設立運動に言及するほか、琉球大学の名称問題や琉球大学の持つ特質などを交えて語るものであった。

まず、山里氏は自身の専門のアメリカ文学・文化研究と琉球大学の歴史研究が、沖縄におけるアメリカとの異文化接触の問題として考えられることを指摘し、自身が体験した湧川清栄氏の講演の衝撃が琉球大学の歴史を考える一つのきっかけになったことを紹介した。沖縄に生まれた湧川氏は12歳でハワイに渡り、ハワイ大学や東京帝国大学で学び、アメリカで教鞭などをとった。山里氏は、湧川氏が戦後ハワイで設立した沖縄救済更生会の活動を述べ、更生会が教育に希望を見出し沖縄に大学を設

立しようとした運動を紹介した。これまで琉球大学の沿革を語るときはアメリカ側からの視点で描かれることが多かったが、このハワイの活動や沖縄での設立運動の盛り上がりを見る必要を指摘し、「環太平洋オキナワ系ディアスポラ」の動きをとらえる視点を提示した。

また、琉球大学の設立とそう名付けられた経緯などについて触れ、それには複雑にからんだ「沖縄人観」・政治的軍事的意図・アメリカの大学設立の理念（ランドグラント大学）などが背景にあったことを述べた。名称問題に見られるように様々な意図をもって誕生した琉球大学であったが、琉球政府立以降は、教員養成や復帰運動で琉球大学独自の役割を果たすようになったという。最後に、琉球大学と占領軍の関係（布令30号）や、ミシガン州立大学から大学のシステムなどを指導するためにやってきたミシガン・ミッションの活動を紹介し、他大学には見られない琉球大学の特質を指摘した。琉球大学は設立して60周年を迎える。アーカイヴズを充実させながら記念誌の作成を期したいとし、講演を締めくくった。（齊藤研也）

情報交換会 記念講演終了後、キャンパス内を自由散策した後、琉球大学内「うりずん」にて情報交換会を開催した。司会進行は伊藤昌弘氏（成蹊学園）と玉置栄二氏（桃山学院）が行った。開会挨拶は澤木武美氏（神奈川大学）が、乾杯の音頭は伊藤昇氏が務めた。新規入会会員や新規担当者を中心に紹介、情報交換がなされた。閉会の辞は中村青志氏（東京経済大学）が行った。

全国大学史資料協議会2008年度
役員会議事録（抄）

（第88回全国大学史資料協議会
東日本部会幹事会議事録）

日 時 2008年10月9日（木）
13時30分～14時00分

会 場 琉球大学
研究者交流施設50周年記念館

出 席 （東日本部会）
神奈川大学（副会長）
慶應義塾（監査委員）
成蹊学園（事務局）
大東文化大学（監査委員）
東京経済大学（会計委員）
東海大学（運営委員）
日本大学（事務局）
武蔵野美術大学（事務局）
明治大学（会長）
中村 青志（運営委員）

（西日本部会）

大阪大学（幹事）
関西大学（会報担当）
同志社大学（部会長）
広島大学（副庶務）
桃山学院（副部会長）
立命館（庶務）
龍谷大学（会計）

議 題 (1)2008—2009年度協議会役員の交代
について

* 「全国大学史資料協議会規約」第
6条、第3項にもとづいて役員交
代を行い、会長を明治大学（東日
本部会会長）、副会長を同志社大
学（西日本部会部会長）とした。
また役員会の互選により事務局に
武蔵野美術大学（東日本部会事務
局）を選出した。上記の結果を総
会で報告し、その承認を得るこ
とを申し合わせた。

(2)2008年度総会・全国研究会の運営
について

* 大会運営について、参加状況・準
備事項及び収入・支出の説明を行っ
た後、各役員の役割を「役割分担
案」に基づいて確認した。

(3)2008年度東西両部会の共同事業に
ついて

* 研究叢書第9号が本日刊行された
報告があり、第10号は西日本部会
が担当となることを確認した。

* 協議会ホームページの一部整備に
ついて、東日本部会からトップペー
ジのレイアウト変更、お知らせメー
ル機能の追加、費用案について提
案があり、西日本部会で持ち帰っ
て検討することとなった。

(4)その他

特に無し。

全国大学史資料協議会
東日本部会幹事会議事録（抄）

第89回 2008年10月11日（土）12時～12時20分

会 場 沖縄県公文書館1階講堂

出 席 神奈川大学 慶応義塾大学
成蹊学園 大東文化大学 東海大学
東京経済大学 日本大学 明治大学
武蔵野美術大学

議 事 (1)2008年度の研究会について

* 事務局（武蔵野美術大学）から、
本日、臨時の幹事会を開いた事由
と議事の説明が次のとおりなされ、
研究会の基本方針ならびに12月11
日（木）の東洋学園大学史料室の見
学会の実施について、了承された。
また、今後も実施する研究会も具
体的な案が決まり次第、幹事会に
諮り了承を貰う形で進めて行くこ
とが申し合わされた。

*先般、本年度の研究会の基本方針と計画について、研究会担当校（東海大学）、会長校（明治大学）ならびに事務局校（武蔵野美術大学）で打ち合わせを行い、資料のとおり案が決定した。研究会の実施については、幹事会に諮り了承を得ることが申し合わされているので、本日、臨時に幹事会を開き、その案について諮りたい。

*研究会担当校（東海大学）から本年度研究会の実施について、資料に基づき次のとおり、報告がなされた。

研究会の基本の方針としては、年間の研究会の形式を4つに分け、講演会形式、大学関係見学会、大学外関係研究会、会員の研究発表とし、各形式の回数については、柔軟に対応する。

研究会は、すでに7月に講演会形式の研究会を行い、本日、全国研究会を実施した。今後の計画は、12月に東洋学園大学史料室の見学会の打診をし先方からも内諾をいただいている。また、1月もしくは2月に、日本建築学会建築博物館の見学を予定しているが、先方との連絡調整中で、実現するかどうかは未定である。この博物館は、学会が設立した博物館であり、学会がアーカイヴズに取り組んでいる例として希少な形態をとる博物館であるため、見学会を実現させたいと考えている。以前に建築学会と共同でシンポジウムを開いたことがあり、その伝手をたどり実施に向けて努力したい。しかし、この企画が実現出来なかった場合には、早急に第2案を考える予定

である。

なお、2月、3月の研究会については、未だ具体的な計画がたてられない状況で、幹事校の方々で良い案のある方は、是非、案をお知らせ願いたい。特に会員の発表については、事前の準備に期間を要すると考えられるため、早期に企画をしないと実施が困難になる可能性があるため、よろしく願いたい。

*事務局（武蔵野美術大学）から、この研究会の基本方針・計画は、本年度の東日本総会で行ったアンケートも参考にしつつ策定したものであるが、今後さらに研究会の内容で良い案があれば、研究会担当校（東海大学）へ申し出て欲しい旨発言があった。また、今年度より、各研究会の準備、交渉から実施、運営までを幹事が交代して担当することになっており、12月研究会を担当していただける幹事がいれば研究会担当校（東海大学）に申し出て欲しい旨依頼があった。

*明年1月以降の研究会について具体案を迅速に決めていくため、次回の幹事会を待たず、研究会担当校（東海大学）が検討を進めることを申し合わせた。

第90回 2008年12月11日(木)12時～14時
 会 場 東洋学園大学1号館1505会議室
 出 席 神奈川大学 慶應義塾 國學院大學
 成蹊学園 大東文化大学 東海大学
 東京経済大学 東洋大学校友会
 武蔵野美術大学 明治大学
 中村 青志 西山 伸
 議 事 1. 2008年度全国総会・研究会総括
 事務局の武蔵野美術大学の石田

氏より、過去10年間の協議会全国総会参加者数の資料を基に、総会会場が大都市圏から離れるほど参加者が減少している傾向が報告され、参加者数の確保と開催地の開拓のバランスのとり方についての問題提起があった。審議の結果、武蔵野美術大学が問題を整理し1月の幹事会で再び審議することとなった。

2. ホームページへの機能追加について

ホームページ担当の成蹊学園の伊藤氏より、トップページの変更は西日本部会も了承したが、お知らせメール機能の追加については西日本部会の12月の幹事会において承認されなかったこと、西日本部会では次回以降も審議することが報告された。そのため、トップページの変更のみを先に依頼できるかどうかをデザイナーに確認し、可能ならまずはトップページの変更を行うこととなった。

3. 今年度研究会について

研究会担当の東海大学の馬場氏より、別紙資料を基に今後の研究会の予定内容について提案があり、大筋で了承された。細部の調整は担当者が詰めることとなった。また、3月の研究会では参加会員に2009年度の研究会のテーマ等についてのアンケートを実施する予定であることが報告され了承された。

4. 東日本部会体制・業務の見直しについて

「体制・業務の見直し検討委員会」委員長の神奈川大学の澤木氏より別紙資料を基に、規約の見直し案について説明があった。審議の結

果、案は保留となり、1月にまた審議されることとなった。

次に、武蔵野美術大学の石田氏より業務の見直し案についての説明があったが、時間の都合上、審議は1月の幹事会にて行うこととなった。

5. 研究叢書掲載論文の北海道大学アーカイブへの収録依頼について

事務局より、依頼内容についての資料を基に説明がなされ、審議の結果、論文の発行母体を明記すること、申請書を提出してもらうことを条件に承認された。また、今後本件のような依頼があった場合は、事務局で手続きをし、幹事会で追認を受けるということが決定された。

6. 東日本部会への入会申し込みについて

事務局より、駒沢女子大学、越知専氏、佃隆一郎氏からの入会申し込みがあったことが報告され、入会が承認された。

7. 「大学史展」進捗報告

実行委員長の西山氏より、別紙資料を基に、ワーキンググループを立ち上げ、展示に関するアンケートを実施したこと等の経過が報告された。次に展示期間、場所、内容が説明され、期間、場所を案どおり決定した。今後、明年3月の幹事会で展示計画を決定し、5月の総会で承認を受けることとなった。

8. 研究叢書第9号刊行報告

叢書担当の日本大学が欠席の為、明年1月の幹事会に延期することとなった。

9. 会報編集進捗報告

会報担当の神奈川大学の齊藤氏より、会報 No. 39はやや遅れたが刊行されたこと、また No. 40は現在、今年度全国総会・研究会を中心に編集集中であるとの報告がなされた。

10. 『二十年の歩み』編集進捗報告

主査の明治大学の村松氏より、別紙資料を基に、原稿集約の目処がつき年度内に刊行されることが報告された。なお送料等を含めた予算については明年1月の幹事会にて報告することとなった。

11. その他

(1)東日本部会封筒の作成について

事務局より、封筒の残部が少なくなってきたため、新たに作成したいとの提案がなされ、審議の結果、これまでのB5サイズから作成する封筒はA4サイズに変更し作成すること、デザインは武蔵野美術大学が担当することとなった。

(2)本日開催研究会へのオブザーバー参加について

事務局から、聖路加看護大学図書館の本日の研究会へのオブザーバーとしての参加の申出があったことが報告され、了承された。

第91回 2009年1月22日(木)13時～14時45分

会 場 武蔵野美術大学

新宿サテライト roomE

出 席 神奈川大学 慶應義塾 國學院大學
成蹊学園 大東文化大学 東海大学
東京経済大学 東洋大学校友会
日本大学 武蔵野美術大学
明治大学

中村 青志 (東京経済大学)

議 事 審議に先立ち、幹事会に初めて出席する齋藤智朗 (國學院大學)、小川

雄 (日本大学)、目七哲史 (東海大学) の3氏から挨拶があった。

1. 2008年度全国総会・研究会総括

*事務局校 (武蔵野美術大学) より前回の幹事会の協議内容をまとめた資料について説明があった。協議の結果、東西両部会の意志疎通を改善する必要性が認められ、従来の東西両部会窓口担当校 (武蔵野美術大学、桃山学院) 間の事務連絡に加えて、会長校 (明治大学、同志社大学) 間でコミュニケーションをとること、西日本部会役員校に対し東日本部会幹事会議事録をメールで送付することが了承された。

2. 今年度研究会について

*研究会企画・運営担当校 (東海大学) より、第4回・第5回研究会について、資料の通り説明があった。未定であった第5回研究会の椿田卓士氏 (東海大学学園史資料センター) 「東海大学学園史資料センターの資料整理作業について」の会場について、武蔵野美術大学新宿サテライトで開催することを決定した。

また、2009年度研究会に向けアンケートを実施するための案文について資料に基づき説明があり了承された。次回の第5回研究会で配布・回収し、未参加者に対しても実施することが了承された。

3. 東日本部会体制・業務の見直しについて

*検討委員会委員長の澤木武美氏 (神奈川大学) から、前回幹事会の意見を反映させ修正した「東日本部会規約新旧対照表(案)」ならびに新規規定の「東日本部会名誉

会員内規（案）」について資料に基づき説明があり、審議の結果了承され、次年度部会総会に諮ることを決定した。

- * 検討委員会委員の石田順二氏（武蔵野美術大学）から、東日本部会業務の見直し案の内、「『研究叢書』の取扱いの見直し」について、前回幹事会の意見を反映させた修正案が資料に基づき説明があり、審議の結果「会計支出基準」、「総会・研究会等における講演・報告の概要の記録」と併せて資料案どおり見直すことを決定した。

4. 2009年度部会総会について

- * 会場校の自薦・他薦が無く、継続審議とすることが了承された。

5. 研究叢書第9号刊行報告

- * 編集担当校（日本大学）より、研究叢書第9号の残部と経費に関する報告が口頭でおこなわれた。また、編集にあたって特に校正の徹底をはかり、印刷費は増えたものの満足いく内容の充実に努めたことも報告された。

6. その他

- ・ 『二十年の歩み』編集報告
- * 主査の村松玄太氏（明治大学）より、2月中に入稿する目処が立ち年度内刊行の運びとなったことと送料を含めた経費の概算について報告があった。
- ・ 東日本部会封筒デザイン案について
- * デザイン担当の阿久津朋子氏（武蔵野美術大学）から、サンプルを回覧しながら新デザイン案の説明があり、審議の結果、案どおり決定した。今後の若干の修正については阿久津氏に一任することが了

承された。

- ・ 協議会ホームページへの企業史料協議会主催研修講座開講案内の掲載について
- * 事務局校（武蔵野美術大学）より、「昨年末、企業史料協議会から広報の依頼があった。前年度までは事務局の判断で東日本連絡メールで広報していた。同メールはその機能をホームページに移すことで廃止された。会員以外からの掲載依頼は初めてであり、東西両部会の幹事会に諮るべきであったが、申し込み期限が迫っていることもあり掲載した。事後了承としてしまったことをお詫びする。西日本部会には1月に連絡し、了承を受けた」旨の報告があり、了承された。
- * 今後の外部からの掲載依頼については、東西両部会の窓口担当校が協議して決定し、掲載した場合には幹事会に事後報告することとなった。
- ・ 協議会ホームページの企業史料協議会ホームページよりのリンクについて
- * 事務局校（武蔵野美術大学）より、企業史料協議会からリンクの申込みがあった旨の報告があり、許可を出すことが了承された。なお、西日本部会にはすでに連絡し了解済みであることが付け加えられた。相互リンクについては今後の検討課題となった。
- * 今後のリンクの依頼については、ホームページへの掲載依頼と同様、東西両部会の窓口担当校が協議して決定し、許可した場合には幹事会に事後報告することとなった。

- ・本日開催研究会へのオブザーバー参加について
- *事務局校（武蔵野美術大学）より、聖路加看護大学図書館がオブザーバーとして参加希望の申し出あった旨の報告があり、参加について了承された。

**全国大学史資料協議会
東日本部会研究会記録（抄）**

- 名 称 全国大学史資料協議会2008年度全国研究会（第62回東日本部会研究会）
- テーマ 「戦時下・占領下・米国統治下における大学史料」
- 日 時 2008年10月10日（金）～11日（土）
- 会 場 10月10日（金）琉球大学研究者交流施設50周年記念館
10月12日（土）沖縄県公文書館
- 出 席 <東日本部会>
愛知大学 神奈川大学 関東学院
慶應義塾 駒澤大学 芝浦工業大学
上智大学 女子美術大学 成蹊学園
専修大学 大東文化大学 東海大学
東京経済大学 東北学院 南山大学
日本体育大学 日本大学
北海道大学 武蔵学園
武蔵野美術大学 明治学院
明治大学 立教大学
中村 青志（東京経済大学）
<西日本部会>
大阪大学 大谷大学 関西大学
熊本大学 神戸女学院
西南学院大学 同志社大学
広島大学 福岡大学 桃山学院
立命館 龍谷大学
（オブザーバー 宮本和子
（沖縄キリスト教学院大学））
*東日本部会分
<機関>23校(30名)<個人他>1名
<合計>31名

西日本部会分
<機関>12校(15名)<個人他>1名
<合計>16名

司 会 熊 博毅氏（関西大学）
開会挨拶 明治大学 鈴木 秀幸氏
（全国大学史資料協議会会長校）

テーマ発題 西口 忠氏（桃山学院）

特別講演 10時30分～11時30分

講師紹介 西口 忠氏（桃山学院）

講 師 新崎 盛暉氏（嘉数学園理事長、元
沖縄大学学長）

演 題 「沖縄戦後史と沖縄大学の歩み」
[概要]

新崎氏の講演は、戦後、米軍の支配を経て、沖縄最初の私立大学として設立された沖縄大学の歩みを通し、沖縄の戦後について、本土（日本）との認識の違いを述べたものであった。

戦前の沖縄には高等教育機関がなく、戦後、米軍政府により琉球大学が設立された。その後、高等教育機関の改善を求める社会的要請が高まり大学設立運動が展開し、沖縄大学、国際大学などの私立大学が設立されていった。

沖縄返還後、沖縄の大学がいずれも大学設置基準を満たしていなかったため、政府は、琉球大学を国立大学とし、私立大学は沖縄大学と国際大学を統合して一つにし、日本の大学設置基準に合わせようとする方針を打ち出した。沖縄大学にとって、私立大学統合案は賛成できるものではなかったが、政府の財政的支援を得て、大学を本土並みのレベルにまで引き上げると考える大学人もあり、統合賛成派と自主存続派に分裂した。大学内部の分裂という重大な試練を経て、自主存続路線を選んだ沖縄大学は、文部省に対して政令による廃

校方針の取り消しを求める訴訟を起こした。結果的に、沖縄大学は規模を縮小して存続を果たしたが、小規模大学の前途は多難であり、沖縄の独自性を生かした大学再建に取り組んでいった。その取り組みが、現在も沖縄大学の地域に根ざした大学創りに生かされている。(田渕正和)

現場からの報告 13時15分～15時55分

進行 菅 真城氏 (大阪大学)

高橋 秀典氏 (日本大学)

報告① 豊田 雅幸氏

(立教大学立教学院史資料センター)

「立教大学における戦時下研究と資料」

[概要]

まず、なぜ戦時下研究なのかということから報告が始まった。立教大学の年史における戦時下の扱いが、『百年史』までは立教側からしか書かれていないため被害者意識が基調であったこと、そして資料編のみになってしまい十分な分析研究を深められなかったことなどが背景としてあった『百二十五年史』編纂終了後のあり方をめぐる議論の中で、研究活動を重視した組織の必要性が浮かび上がったと同時にOBによる当局への働きかけもあり、学院史資料センター設立直後に戦時下研究がスタートした。

2001年度より開始した研究活動として、基幹資料の整備を行い、報告書、論文集を刊行した。その間研究プロジェクトと科研費の採択を受けた。

資料整備は学内資料を確認の上、基幹となるもののテキスト化(5資料)と目録化(5資料)を行い、3度の海外調査により資料発掘も行った。

た。海外調査では、米国聖公会文書館において、これまで未確認であった宣教師書簡や写真資料を発掘し、また米国国立公文書館において発見した写真資料の内、立教のチャペルの祭壇が破損されている写真は、公職追放が最初に立教から行われたことに大きく関わっているのではないかと推測させる資料であったとのことだった。

最後に、ホームページを開設し、来年度から所蔵資料をデータベースで公開する予定であることが述べられ、報告は終了した。(阿久津朋子)

報告② 石田 雅春氏 (広島大学文書館)

「新制国立大学の成立と占領軍文書の関係についての一考察—広島大学と九州工業大学の事例比較から—」

[概要]

戦後の新制国立大学の成立過程には地域との関係が大きく影響しているのではないかという仮説をもとに、広島大学と九州工業大学の2つを事例として取り上げ、両者の成立期の資料の比較分析によって検証した研究の報告がなされた。個別の大学と地域との関係性をテーマとした研究の先行例は少ない。戦後の文部省による国立学校の統合方針により、広島大学は前身校6校の統合によって総合大学として創設された。これに対して九州工業大学の前身は明治工業専門学校のみである。また、広島大学の創設の背景には、広島県と隣接する岡山県との対立関係が一因となって広島県住民側からの強い要望があったこと、また占領軍文書に残されている史料からは占領軍に対して地域住民からの積極的な陳情という政治的な活動があったことが

確認された。その後の広島大学の移転についても学園紛争が原因ではなく、実際は県内の中でも発展の遅い東広島市へ移転させることによってこの地域を活性化しようという県からの要請があったことが要因であることも述べられた。これに対して、九州工業大学では地域とは疎遠であったため、政治的な働きかけがなく、単科大学を志向し、占領軍文書には史料が残らなかったのではないかと推測される。以上の考察により地方大学への地域の支援のあり方がその大学の性格と文書の残存状況に大きく影響しているという結論が提示された。(赤堀美和子)

パネルディスカッション

進行 菅 真城氏 (大阪大学)

高橋 秀典氏 (日本大学)

[概要]

パネルディスカッションは、新崎盛暉氏の特別講演ならびに豊田雅幸氏、石田雅春氏の各報告をもとに、菅真城氏 (大阪大学) と高橋秀典氏 (日本大学) の司会で行われた。

新崎氏の講演に対しては、沖縄大学の特性は何か、沖縄大学発足にあたり、どのように教員を集めたのかという質問が出された。新崎氏は、沖縄大学が単位互換制度を最も早く開始したことを強調し、初期は師範学校や中学校教員を教員に任用し、その後、アメリカや本土の大学院で学んだ若手研究者が登用されていたと答えた。

立教大学の戦時下研究と資料の状況を紹介した豊田氏の報告に対しては、これまで編纂された立教学院史が、小学校から大学までの学園全体の歴史像をどのようにつくったか、

研究活動に力を入れる立教学院史資料センターの組織的位置づけ、英文資料の整理や活用の仕方、個人名が登場する資料に対するプライバシーの配慮などの質問が出された。豊田氏は、教職追放問題や資料の中の個人名に関し、慎重な取扱いの必要性を指摘していた。

石田氏の報告は、新制国立大学の成立過程に関して、総合大学化を実現した広島大学と単科大学にとどまる九州工業大学の例を、占領軍文書を利用して地域からの政治的支援を比較したもので、地方史の観点からも興味深いものであろう。九州工業大学については、新制大学発足時に、福岡県に九州大学とともに総合大学を二校つくる可能性がはたして現実に存在したのかという質問が出された。石田氏は福岡県に二校の総合大学をつくる可能性があったと考えると答えた。

戦時下・占領下の時期の大学の実態は、従来の大学史編纂で必ずしも十分に掘り下げられていないが、今回の報告と議論を突破口として、取組みが進んでいくことを期待したい。(中村青志)

*特別講演、各報告、パネルディスカッションの詳細については、『研究叢書』第10号に収録予定の諸論考を参照されたい。

閉会挨拶 同志社大学 小枝 弘和氏

(全国大学史資料協議会副会長校)

見学会 沖縄県公文書館

[概要]

10月11日(土)に沖縄県公文書館を見学した。那覇市郊外にある沖縄県公文書館は平成7年に竣工し、赤瓦等の沖縄の雰囲気と文書館としての

近代的な機能を併せ持つ建物である。収集資料は、琉球王国時代の古文書、戦前の県政関係文書、米国国立公文書館に残されている戦後米国統治下の英文資料等であり、特に戦前の記録が戦災で失われたため戦後の沖縄固有の歴史を反映した資料を中心に収集しているとの説明があった。また、沖縄上陸戦の前後に米軍が上空から撮影したフィルムが米国国立公文書館に数多く残されており、そこから入手した写真データは貴重な記録映像となっていた。

当日、常設展「記録なくして歴史なし—沖縄の過去を物語る記録」と特別企画「キャラウェイ旋風」が開催されていた。常設展「記録なくして歴史なし」によって琉球王国時代から日本復帰後までの沖縄の歴史を理解した後、特別企画「キャラウェイ旋風」で50年ほど前に沖縄が大きな金融危機に直面した際、第3代高等弁務官のポール・W・キャラウェイによる強引ともいえる金融粛清政策に関わる諸資料を見た。それは、沖縄という特殊な統治形態における実態を表現したものであり、沖縄の歴史を理解する上で好企画の展示であった。

施設では、沖縄県文書保存箱を約49万箱収蔵する書庫、製本補修室、貴重資料を収蔵する特別保存庫等、空調が完備され設備が十分に整った館内を見学した。

立派な施設設備を用意し、充実した歴史資料を収集し、それらを守る豊富な陣容を整えた沖縄県公文書館の見学会は、沖縄県の「記録なくして歴史なし」というアーカイブス精神を実感するものとなった。

(伊藤彰男)

- 第63回 2008年12月11日(木)14時～17時
 会場 東洋学園大学1号館
 「フェニックス・ホール」
 出席 青山学院 神奈川大学 慶應義塾
 國學院大學 芝浦工業大学
 上智大学 成蹊学園 専修大学
 創価大学 拓殖大学 大東文化大学
 中央大学 東海大学 東京経済大学
 東京農業大学 東北学院
 東洋英和女学院 東洋学園大学
 東洋大学校友会 日本大学
 法政大学 武蔵学園
 武蔵野美術大学 明治学院
 明治大学
 東田 全義 青柳小百合
 中村 青志 西山 伸(以上36名)
 [オブザーバー]
 新沼 久美(聖路加看護大学)
 会長校挨拶 鈴木 秀幸氏
 (明治大学史資料センター)
 会場校挨拶 東洋学園大学学長 一ノ渡尚道氏
 東洋学園大学副学長 原田規梭子氏
 報告 ①学校概要(現況)説明…企画開発
 本部事務部長 小原 芳和氏
 ②東洋学園大学における年史編纂と
 史料室設置までの経緯…東洋学
 園史料室 永藤 欣久氏
 見学 史料室/1号館施設(壁画・石碑含む)
 概要 第63回研究会は、午後2時から5
 時まで、2008年度、新機関会員とな
 った東洋学園大学の本郷キャンパスで
 行われた。最初に、学長の一ノ渡尚
 道氏並びに副学長の原田規梭子氏の
 挨拶があり、続いて報告に入った。
 まず、企画開発本部事務部長の小原
 芳和氏が大学の現況について説明を
 行い、引き続き東洋学園史料室の永
 藤欣久氏が「東洋学園大学における
 年史編纂と史料室設置までの経緯」

と題して報告を行った。東洋学園大学は、大正15年に東洋女子歯科医学専門学校として発足、戦後は英語教員を養成する文系の東洋女子短期大学として再発足した。さらに平成4年に東洋学園大学を設置、平成18年には創立80年を迎えるとともに共学4年制大学に移行した。こうした複雑な歴史の変遷が年史編纂と資料収集、史料室設置にどのように影響していったのか、今後の課題を含めた詳細な報告がなされた。報告終了後、各自、1号館の東洋学園史料室および屋外の壁画等を見学した。

(豊田徳子)

第64回 2009年1月22日(木)15時～17時15分
会 場 武蔵野美術大学

新宿サテライト roomA・B

出 席 青山学院 神奈川大学 慶應義塾
國學院大學 駒澤女子大学
駒澤大学 実践女子大学
芝浦工業大学 上智大学
女子美術大学 成蹊学園 拓殖大学
大東文化大学 中央大学 東海大学
東京経済大学 東洋学園大学
東洋大学校友会 日本体育大学
日本大学 武蔵学園
武蔵野美術大学 明治大学
立教大学

東田 全義 越知 専 佃 隆一郎
中村 青志 細井 守 吉川 隆博
(以上40名)

[オブザーバー] 新沼 久美
(聖路加看護大学)

会長挨拶 鈴木 秀幸氏
(明治大学史資料センター)

司 会 馬場 弘臣氏
(東海大学学園史資料センター)

講 演 藤岡 洋保氏 (東京工業大学大学院

教授・日本建築学会建築博物館委員会幹事/資料蒐集担当)

「日本の建築アーカイヴズの現状と課題—日本建築学会建築博物館の活動を中心に」

概 要 藤岡氏は冒頭に、第二次世界大戦後欧米を中心に盛んになった建築アーカイヴズの動向について、それがきわめて多様なあり方を持っていることを紹介した。その上で、欧米の建築アーカイヴズで重視される傾向にあるShow drawingばかりでなく、作業図、配置図、立面図、基礎伏図、矩形図などを意味するWorking drawingも建築のプロセスやその背景を知るためにきわめて価値の大きい記録であるとして、著名建築家の図面分析の実例を通してその重要性を指摘した。そのために、それぞれの図面に対する価値判断については当面留保し、出来る限り広い範囲の図面を保存するべきであると述べた。

続いて、日本建築学会建築博物館の実践例を通じた図面の受け入れや利用について紹介があった。とくに図面の利用においては、規格の問題や著作権保護の困難さなどの課題が残るものの、劣化を防ぐためにデジタル化した上で利用する必要性を強調した。

さらに今後も引き続きデジタル化を推進し、最終的に全国の博物館や資料館に分散する建築アーカイヴズをネットワーク化していくプランを提唱した。

講演終了後、図面のデジタル化、原図の保存、建築物が建ったあとの歴史の変遷、図面を通じた歴史研究の動向等について会場と質疑応答が交わされた。(村松玄太)

全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿
(2008年12月11日現在)

【名誉会員】

竹市 知弘・城田 秀雄・東田 全義

【機関会員】 担当部課室／住所・電話他

- 1 愛知大学 豊橋研究支援課
〒441-8522 豊橋市町畑町1-1
電話:0532-47-4579
FAX :0532-47-4129
URL :http://www.aichi-u.ac.jp
- 2 青山学院 資料センター
〒229-8558 相模原市淵野辺5-10-1
青山学院大学N棟403
電話:03-3409-6742
FAX :03-3409-8134
URL :http://www.aoyamagakuin.jp/mcenter/
- 3 学習院 学習院院史資料室 (休会扱い)
〒171-8588 豊島区目白1-5-1
電話:03-3986-0221
FAX :03-5992-1068
- 4 神奈川大学 大学資料編纂室
(副会長)
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
電話:045-481-5661
FAX :045-491-7915
URL :http://archives.kanagawa-u.ac.jp/
- 5 関東学院 学院史資料室
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
電話:045-786-7066
FAX :045-786-2932
URL :http://www.kanto-gakuin.ac.jp
- 6 慶應義塾 福澤研究センター
(監査委員)
〒108-8345 港区三田2-15-45
電話:03-5427-1604
FAX :03-5427-1605
URL :http://www.fmc.keio.ac.jp
- 7 恵泉女学園 史料室
〒156-0055 世田谷区船橋5-8-1
電話/FAX :03-3303-6920
- 8 皇學館 館史編纂室
〒516-8555 伊勢市神田久志本町1704
電話:0596-22-6817
- 9 國學院大學 校史・学術資産研究センター
(運営委員)
〒150-8440 渋谷区東4-10-28
電話:03-3797-3684
FAX :03-5466-9237
URL :http://www.kokugakuin.ac.jp
- 10 国際基督教大学 図書館大学史資料室
〒181-8585 三鷹市大沢3-10-2
電話:0422-33-3306, 3308
FAX :0422-33-3305
- 11 国士館 理事長室広報課年史編纂室
〒154-8515 世田谷区世田谷4-28-1
電話:03-3418-2691
FAX :03-3418-2694
URL :http://www.kokushikan.ac.jp
- 12 駒澤女子大学 広報部
〒206-8511 稲城市坂浜238
電話:042-331-1911
FAX :042-331-1919
- 13 駒沢大学 禅文化歴史博物館大学史資料室
〒154-8525 世田谷区駒沢1-23-1
電話:03-3418-9613
FAX :03-3418-9611
URL :http://www.komazawau.ac.jp/-zenbunka
- 14 実践女子学園 総務部学園史資料室
〒191-8510 日野市大坂上4-1-1
電話:042-585-8945
FAX :042-585-8808
- 15 芝浦工業大学 総合企画部広報課
〒135-8548 江東区豊洲3-7-5
電話:03-5859-7070
FAX :03-5859-7071
URL :http://www.shibaura-it.ac.jp
- 16 自由学園 自由学園資料室
〒203-8521 東久留米市学園町1-8-15
電話:042-422-3111 (内) 217
FAX :042-422-1078
URL :http://www.jiyu.ac.jp
- 17 上智大学 総合調整室別室
〒102-8554 千代田区紀尾井町7-1
電話:03-3238-3294
FAX :03-3238-3539
URL :http://www.sophia.ac.jp
- 18 女子美術大学 歴史資料室
〒228-8538 相模原市麻溝台1900
電話/FAX:042-778-6754
- 19 聖学院 本部理事長室
〒114-8574 北区中里3-12-2
電話:03-3917-8332
FAX :03-3940-3798
- 20 成蹊学園 史料館
(運営委員・事務局)
〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
電話:0422-37-3994
FAX :0422-37-3704

- URL : <http://www.seikei.ac.jp>
- 21 成城学園 教育研究所
〒157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20
電話:03-3482-1484
FAX :03-3482-5272
URL : <http://www.seijogakuen.ed.jp/>
- 22 専修大学 総務部大学史資料課
〒101-8425 千代田区神田神保町3-8
電話:03-3265-5879
FAX :03-3265-5923
- 23 創価大学 創価教育研究所
〒192-8577 八王子市丹木町1-236
電話:042-691-5623
FAX :042-691-5654
URL : <http://office.soka.ac.jp/faculty/edu-research/>
- 24 大東文化大学 大東文化歴史資料館
(大東アーカイブス)
(監査委員)
〒175-0083 板橋区徳丸2-19-10
電話:03-5399-7646
FAX :03-5399-7647
URL : <http://www2.daito.ac.jp>
- 25 拓殖大学 創立百年史編纂室
〒112-8585 文京区小日向3-4-14
電話:03-3947-7140
FAX :03-3947-7294
- 26 玉川大学 教育博物館
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
電話:042-739-8656
FAX :042-739-8654
URL : <http://www.tamagawa.jp/research/museum/>
- 27 多摩美術大学 大学史編纂室
〒158-8558 世田谷区上野毛3-15-34
電話:03-3702-1168
FAX :03-3702-9416
- 28 千葉商科大学 総務課史料編纂担当
〒272-8512 市川市国府台1-3-1
電話:047-372-4111
FAX :047-373-4283
- 29 中央大学 入学センター事務部大学史編纂課
〒192-0393 八王子市東中野742-1
電話:0426-74-2132 (直)
FAX :0426-74-2203
- 30 津田塾大学 津田梅子資料室
〒187-8577 小平市津田町2-1-1
電話:042-342-5219
FAX :042-342-5249
- 31 東海大学 学園史資料センター
(運営委員)
〒259-1292 平塚市北金目1117
東海大学同窓会館 2 F
電話:0463-50-2450
FAX :0463-50-2449
URL : http://www.u-tokai.ac.jp/shiryu_center/index.html
- 32 東京基督教大学 歴史資料保存委員会
〒270-1347 印西市内野3-301-5-1
電話:0476-46-1131
FAX :0476-46-1405
URL : <http://www.tci.ac.jp/index.html>
- 33 東京経済大学 秘書課
(会計委員)
〒185-8502 国分寺市南町1-7-34
電話:042-328-7955
FAX :042-328-5900
URL : <http://www.tku.ac.jp>
- 34 東京女子医科大学 史料室・吉岡彌生記念室
〒162-8666 新宿区河田町8-1
電話:03-3353-8111 (内22213)
FAX :03-3353-8209
URL : <http://www.twmu.ac.jp/U/facilities/f06yayoi.html>
- 35 東京女子大学 大学運営部総務課大学資料室
〒167-8585 杉並区善福寺2-6-1
電話:03-5382-6294 (直通)
FAX :03-3395-1037
URL : <http://office.twcu.ac.jp/general-affairs/archives>
- 36 東京電機大学 創立100周年記念事業推進本部
〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
電話:03-5280-3723
FAX :03-5280-3740
URL : <http://www.dendai.ac.jp/>
- 37 東京農業大学 図書館
〒156-8502 世田谷区桜ヶ丘1-1-1
電話:03-5477-2525
FAX :03-5477-2639
- 38 東北学院 庶務部広報課
〒980-8511 仙台市青葉区土樋1丁目3-1
電話:022-264-6423 (代表)
FAX :022-264-6478
URL : <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp>
- 39 東北大学 史料館
百年史編纂室
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
電話:022-217-5040 (史料館)
022-217-5042 (百年史)

- FAX :022-217-4998
URL :史料館
<http://www.archives.tohoku.ac.jp>
URL :百年史
<http://www.archives.tohoku.ac.jp/hensan/>
- 40 東洋英和女学院 史料室
〒106-8507 港区六本木5-14-40
電話:03-3583-3325 (代)
FAX :03-3583-3329 (直)
URL :<http://www.toyoeiwa.ac.jp>
- 41 東洋学園大学 東洋学園史料室
〒113-0033 文京区本郷1-26-3
電話:03-3811-2840
FAX :03-3811-5176
URL :<http://www.toyo.ac.jp>
- 42 東洋大学 井上円了記念学術センター
〒112-8606 文京区白山5-28-20
電話:03-3945-7555
FAX :03-3945-7601
URL :<http://www.toyo.ac.jp/enryo/index.html>
- 43 東洋大学 校友会
(会計委員)
〒113-0021 文京区本駒込1-10-2
浦水会館内
電話:03-3946-9111
FAX :03-3946-6311
URL :<http://www.toyo.ac.jp/koyukai>
- 44 獨協学園 資料センター
〒340-0042 草加市学園町1-1
電話:048-946-2800
FAX :048-942-4312
URL :<http://www.dac.ac.jp/>
- 45 名古屋大学 大学文書資料室
〒464-8601 名古屋市中種区不老町
電話:052-789-2046
FAX :052-788-6222
URL :<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp>
- 46 南山大学 史料室
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
電話:052-832-3111 (内3120・3121)
FAX :052-833-6985
- 47 日本工業大学 総務課
〒345-8501 埼玉県南埼玉郡宮代町学園
台4-1
電話:0480-34-4111 (代)
FAX :0480-34-2941
- 48 日本女子大学 成瀬記念館
〒112-8681 文京区目白台2-8-1
電話:03-5981-3376
- FAX :03-5981-3378
URL :<http://www.jwu.ac.jp/>
- 49 日本体育大学 図書館
〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1
電話:03-5706-0907
FAX :03-5706-0913
URL :<http://library.nittai.ac.jp>
- 50 日本大学 総務部大学史編纂課
(運営委員・事務局)
日本大学資料館(仮称)設置準備室
〒102-8251 千代田区五番町12-5
(編纂課)
〒102-8275 千代田区九段南4-8-24
(準備室)
電話:03-5275-9628 (編纂課)
03-5275-8336 (準備室)
FAX :03-5275-8325 (編纂課)
03-5275-9410 (準備室)
URL :<http://www.nihon-u.ac.jp>
- 51 法政大学 図書館総務部総務課大学史担当
〒102-8160 千代田区富士見2-14-17
電話:03-5212-4108
FAX :03-5212-4109
URL :<http://www.hosei.ac.jp/>
- 52 北海道大学 大学文書館
〒060-0808 札幌市北区北8西5
北海道大学附属図書館4階
電話/FAX:011-706-2395 (内線2395)
URL :<http://www.hokudai.ac.jp/bunsoyo/>
- 53 宮城学院 資料室
〒981-8557 仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1
電話:022-279-7765
FAX :022-279-4707
URL :<http://www.mgu.ac.jp>
- 54 武蔵学園 記念室
〒176-8533 練馬区豊玉上1-26-1
電話:03-5984-3748
FAX :03-5984-4785
URL :<http://www.musashi.jp/archives>
- 55 武蔵野美術大学 大学史史料室
(運営委員・事務局)
〒187-8505 小平市小川町1-736
電話:042-342-6091
FAX :042-342-9547
URL :<http://www.musabi.ac.jp/history>
- 56 明海大学 浦安キャンパスメディアセンター
(図書館)
〒279-8550 千葉県浦安市明海1丁目
電話:047-350-4997
FAX :047-355-7992

- URL :http://opac.meikai.ac.jp/
- 57 明治学院 歴史資料館
〒108-8636 港区白金台1-2-37
電話/FAX:03-5421-5170
URL :http://www.meijigakuin.ac.jp/~siryokan/
- 58 明治大学 大学史資料センター
(会長)
〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
電話:03-3296-4085・4329
FAX :03-3296-4329
URL :http://www.meiji.ac.jp/history/
- 59 立教女学院 学院資料室
〒168-8616 東京都杉並区久我山4-29-60
電話:03-3334-5105
FAX :03-3334-8393
URL :http://www.rikkyo.ne.jp/grp/jogakuin-shiryo/
- 60 立教大学 立教学院史資料センター
〒171-0021 豊島区西池袋3丁目
電話/FAX:03-3985-2790
URL :http://www.rikkyo.ne.jp/web/z3000450/index.html
- 61 立正大学 総務部総務課
〒141-8602 品川区大崎4-2-16
電話:03-3492-2681
FAX :03-5487-3338
URL :http://www.ris.ac.jp
- 62 早稲田大学 大学史資料センター
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町513
早稲田大学研究開発センター
120-1号館5階
電話:03-5286-1814
FAX :03-5286-1815
URL :http://www.waseda.jp/archives/
- 63 念センター/オープン・リサーチセンター)
- 11 神谷 智 (愛知大学文学部)
- 12 北村 和夫 (聖心女子大学文学部)
- 13 桑尾光太郎 (学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ専攻事務室)
- 14 坂口 貴弘 (国文学研究史料館アーカイブズ研究系)
- 15 谷本 宗生 (東京大学史料室)
- 16 佃 隆一郎 (愛知大学東亜同文書院大学記念センター/オープン・リサーチセンター)
- 17 寺崎 弘康 (神奈川県立歴史博物館)
- 18 中村 青志 (運営委員・東京経済大学)
- 19 中村 治人 (岡崎女子短期大学)
- 20 中村 頼道 (企業史料協議会)
- 21 西山 伸 (運営委員・京都大学大学文書館)
- 22 日露野好章 (東海大学課程資格教育センター博物館学)
- 23 藤田 正 (愛媛県歴史文化博物館)
- 24 古郡 信幸 (清泉女子大学)
- 25 細井 守 (藤沢市教育委員会博物館準備担当)
- 26 松崎 彰 (中央大学図書館)
- 27 吉川 隆博

個人会員

- 1 青柳小百合 ((株)ニチマイ)
- 2 秋山 俱子
- 3 安藤 正人 (学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ専攻)
- 4 石原 一則 (神奈川県立公文書館)
- 5 伊藤 純郎 (筑波大学大学院人文社会科学研究所)
- 6 上田 絳代 (東京女学館中学校・高等学校)
- 7 内山 宏 (日本図書館協会・日仏図書館情報学会・経済資料協議会)
- 8 大沢 泉 (八戸大学商学部)
- 9 小川千代子 (国際資料研究所)
- 10 越知 専 (愛知大学東亜同文書院大学記

ご案内

全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

【武蔵野美術大学・大学史史料室】

〒187-8505
東京都小平市小川町1-736
☎ 042-342-6091

【日本大学・総務部大学史編纂課】

〒102-8251
千代田区五番町12-5
☎ 03-5275-9628

【成蹊学園・史料館】

〒180-8633
武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
☎ 0422-37-3994

会報編集

【神奈川大学・大学資料編纂室】

〒221-8686
横浜市神奈川区六角橋3-27-1
☎ 045-481-5661